

# 死者の書(人形アニメーション映画)

2006(平成18)年6月2日鑑賞(東映試写室)



監督・脚本＝川本喜八郎／原作＝折口信夫／声の出演＝宮沢りえ／観世鏡之丞／榎木孝明／江守徹／観世葉子／黒柳徹子／新道乃里子／三谷昇／語り＝岸田今日子（桜映画社配給／2005年日本映画／70分）

……日本が誇る国文学者、折口信夫氏の小説『死者の書』が、人形アニメで登場。時代は8世紀半ばの奈良時代。當麻寺<sup>たいまでら</sup>に伝わる中将姫<sup>はすいとまんだら</sup>の當麻曼陀羅<sup>たいまんだら</sup>の伝説が、色鮮やかに展開される。人形アニメ映画大好き人間はハマってしまうかもしれないが、私にはどうも……？ いずれにしても、大津皇子<sup>おおつのみこ</sup>の悲劇など、歴史的背景の勉強が不可欠だよ……。

## 『死者の書』が人形アニメーション映画として完成！

折口信夫の原作『死者の書』を人形アニメーション映画として完成させたのは、1925年生まれの人形アニメーション作家であり、人形美術家である川本喜八郎氏。人形アニメーション映画とは、1964年から5年間、NHKの連続人形劇として放映されて大ヒットした『ひょっこりひょうたん島』のように、人間があやつる人形がスクリーン上に登場し、そのセリフを各人形を担当した声優が語るといふもの。そして『死者の書』とは、8世紀半ばの奈良時代、藤原南家<sup>ふじわらなんけ</sup>の郎女<sup>いらつめ</sup>の一途な信仰が、謀反の罪で処刑された大津皇子<sup>おおつのみこ</sup>のさまよう魂を鎮めるといふ物語……。

## 當麻寺の蓮糸曼陀羅とは……？

物語の舞台は、大和と河内の境、二上山のふもとにある當麻寺<sup>たいまでら</sup>。『死者の書』は、この當麻寺に伝わる中将姫<sup>はすいとまんだら</sup>の蓮糸曼陀羅<sup>れんしとまんだら</sup>の伝説をモチーフにして書かれたもの。この映画を観た数日後の2006年6月10日付日経新聞の當麻曼陀羅<sup>たいまんだら</sup>図の販売広告によれば、この當麻曼陀羅<sup>たいまんだら</sup>図は、「私の教えに深く帰依した中将姫が、写経の

功德によって目の当たりにされた極楽浄土を、蓮の糸を染めて一夜にして織りあげたという伝説とともに遺されています」、そして、「現在、當麻寺のご本尊として祀られているこの曼陀羅は4メートル四方もある大きなもので、『蓮糸大曼陀羅』とも『綴織當麻曼陀羅』とも呼ばれ、また、西方浄土を現しているところから『観無量寿経浄土変相図』とも称されています」と書かれている。ちなみに、この広告における當麻寺奥院が認可・監修した『當麻曼陀羅図（平成本）』は、一括価格30万円（税別）とのこと……。

## ■大津皇子とは？

大津皇子（観世鏡之丞）は天武天皇の皇子で、文武に秀でた美男子だったらしい。そして、数多い皇子の中で、最も人望の厚かった人物とのこと。またその母親は、後の持統天皇（女帝）の姉で、天智天皇の皇女であった大田皇女とのこと。この大津皇子は、天武天皇の死後、皇太子である草壁皇子に対する謀反の疑いをかけられて死刑に処せられた。それが24歳の時で、大津皇子の亡骸は二上山に葬られた。以上は、歴史上の事実（？）だが、身に覚えのない謀反の罪によってこの世に恨みを残したまま非業の死を遂げた若い魂は、容易に浄化せず、死後50年ほどして、塚の中で甦ってくるというのが『死者の書』のストーリー。

## ■藤原南家の郎女とは？

他方、藤原南家の姫、郎女（宮沢りえ）は『称讃浄土経』を一心に写経し、仏の教えに帰依している女性。彼女は何かに導かれるように當麻寺へたどり着き、當麻の語り部の媼（黒柳徹子）から、大津皇子の悲劇の物語を聞かされた。その後郎女は、ある日皇子の亡霊と出会い、その身を覆う衣をつくるため、ひたすら祈りながら、蓮の糸で布を織りはじめることに。そして完成したのが、當麻曼陀羅というわけだ。

## ■人形による微妙な表現がポイントだが……

私は文楽や人形浄瑠璃などの伝統芸能を含めて、人形劇そのものにあまり興味

がないから、この映画が全然知らない物語だとすれば、行ってなかったはず。しかし、大津皇子と當麻寺の當麻曼陀羅の話は、ボンヤリと聞いたことのある物語だったため、それをきちんと勉強してみようと思って出かけて行ったもの。

チラシには、国文学者で歌人でもある岡野弘彦氏が、「人形が演じる人間の心理の深い表現におどろかされました」「そういう内面の深い変化は、現し身の人間が演ずるよりも、微妙な人形の表現を重ねて表現することによって、よりいちじるしく、より真実に実感せられるのだということをつくづくと知ることができました」などと絶賛しているが、残念ながら私は、人形の表情や動作にそこまでの価値(?)を見い出すことができず、ただ物語をなぞっていただけ……。

また声の出演としても、宮沢りえはあまり印象に残らず、全体の語りをする岸田今日子の声がやけにはっきりと……。

そもそも私には、人形アニメーションというスタイルの映画が向いていないということを痛感……。

2006(平成18)年6月10日記

#### ミニコラム

### この時代の映画は人気薄……？

織田信長・豊臣秀吉・徳川家康を描いた戦国モノや吉田松陰・高杉晋作・勝海舟・坂本龍馬・伊藤博文らを描いた幕末モノ・明治維新モノは日本人に大人気。しかし、大化の改新、聖徳太子、額田王らを描いた映画はそもそも数が少ないうえその人気はイマイチ。ましてや、天智天皇 VS 天武天皇、草壁皇子 VS 大津皇子の物語などは、発覚後大問題となった「世界史の未履修

問題」と結びつけなくとも、今ドキの高校生は全く勉強していないはず。そしてそれは、中学生・高校生の父親・母親であるあなたもほとんど同じ？ したがって、そんな時代を背景とした映画が人気薄なのは当然だが、それって日本人の日本史についての知的レベルの低さを物語っているのでは……？

2006(平成18)年11月22日記